

古文書解説にチャレンジ！ その2 解答

【筆耕】（くずし字の書きおこし）  
何れも

病身二而、暑氣之時節 乍恐入牢等二而も

被 仰付候次第二而者、存命も無覚束候迪、銘々

老父母妻子等昼夜寢食も打忘れ悲歎

罷在、如何ニも寺檀之間柄、難見忍、微心魂

歎ケ敷、此段連印を以御歎願奉申上候、

【読み下し】（筆耕を読み言葉にしたもの）

何れも病身にて、暑氣の時節 恐れながら入牢等にてても

仰せ付けられ候 次第にては存命も覚束なく候迪、銘々

老父母・妻子等 昼夜 寢食も打忘れ 悲歎

罷り在り、如何にも寺檀の間柄、見忍び難く、微心魂なが

ら 歎ケ敷、此の段 連印を以て御歎願申上げ 奉り候、

【現代語訳】

（捕えられた者たちは）どの者も病気の身なので、おそれながら、暑いさなかに入牢を仰せつけられるようなことになれば、生きていることも難しいだろうと、銘々の老父母や妻子は昼夜とわず寢食もわすれて悲歎にくれております。（私共寺僧にとつては）寺と檀家との間柄ですので、見捨てておくことはできず、心ばかりながら嘆かわしく思い、このことを私共寺僧の連印をもって歎願申しあげます。

この文字に注目：闕字（けつじ）

本文三行目には次のような表現があります。

被 仰付候次第

一字目の「被」は崩しが強く、右側の「皮」部分だけしか残っていません。この字は返読文字で、「仰せつけられ候」と下から返って読みます。また、右の例をみると「被」のあとに一字分の空白があることがわかります。この空白は「闕字（けつじ）」といって、相手に敬意を表すための手法です。

また、今回の箇所のおすぐ後に

御慈悲を以て、前書の始末逸々御憐察、万右衛門（以下略）と読みますが、「御慈悲」の前に改行がなされています。「御慈悲」を下さる相手（今回は歎願書の宛先である代官所）に敬意を表して改行することを「平出（へいしゅつ）」といいます。

ほんの一部ですが、くずし字の読み方のヒントをご紹介します。興味がおありの方は『東村山市史研究』二十五〜二十七号掲載の「史料紹介」にも文書資料を紹介しておりますのでご覧ください。

また、当館では「古文書講座入門編」等講座も開講しております。詳しくは職員（寺西、今村）までお尋ねください。